

温故知新

中山の古刹 金剛定寺

金剛定寺は、大字中山の集落の高台に位置する天台宗の古刹です。聖徳太子の開基で、8世紀頃から奈良の東大寺に属し、平安時代にかけて規模を拡張していきました。

このことを証明するように、金剛定寺には日野町内最古の仏像になる、9世紀末の聖観音立像が安置されています。頭から体の中心部分を一本の材木から造る「一木造」で、像の内側に空洞を造らない丸彫に近い古式な構造がとられています。頭上には大きく渦巻く髻を結い、耳にも渦巻く髪をかけ、古風な天冠台が付けられた優美ないでたちで、着衣の衣紋表現も自由で個性的なデザインが用いられています。これらは、いずれも平安時代前



▲金剛定寺にある聖観音立像

近江日野商人館(大窪)、近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」(西大路)の開館時間は、午前9時から午後4時まで、休館日は毎週月・火曜日、祝日の翌日、年末年始になります。入館料は、大人個人三〇〇円、大人団体(三〇名から)二五〇円、小中学生二二〇円です。ぜひご来館ください。

中世の荒廃と復興

鎌倉時代になると、園城寺(三井寺)から住持が招かれ、法相宗・真言宗・天台宗の三宗を兼ねた寺院となりました。江戸時代の後期に、室町時代の寺院を復元的に描いた「金剛定寺古図」によると、中山の山中一帯に数多くの堂塔伽藍が立ち並んでいたようすがうかがえます。

文亀三年(1503)の兵火によって寺院は焼失しますが、永正6年(1509)、奈良東南院の命により本尊の復興が始まり、翌年開眼供養を遂げたことと記されています。

金剛定寺の本尊である十一面観音坐像は技法や表現から室町時代後期の作品であるとされており、まさにこの本尊が永正7年に復興された像と考えられています。

このほか金剛定寺には「大永五年(1525)八月吉日」の墨書をもつ大日如来坐像が安置されており、寺伝の記録から、蒲生高郷がその復興に助力したことがわかっています。その後、戦乱や火事によって、衰退と復興を繰り返し、現在の寺院の景観となったのは、江戸時代後期のことでした。右で紹介した諸仏が安置されている観音堂(現在の本堂)は、享和二年(1802)頃から整備されたことがわかっています。観音堂の復興は村人を中心に進められました。当時の中山村の領主・旗本関氏も助力していたことが記録に残ります。

建立後二百年が経過し、長年の風雪により屋根・壁が大きく損傷したため、現在、本堂の修復工事が行われています。美しい姿を取り戻すのは来年春の予定です。



▲金剛定寺の本尊である十一面観音坐像